

平成18年度津山工業高等専門学校有識者懇話会記録

1 日 時 平成19年3月27日(火) 14時30分～17時30分

2 場 所 津山工業高等専門学校会議室

3 出席者

外部委員

岡山大学副学長	稲 葉 英 男
津山市長	桑 山 博 之
岡山県美作県民局長	小 林 彬 二
津山商工会議所会頭	浮 田 佐 平
津山高専同窓会会長	末 澤 俊 一
美作地区中学校長会会長	為 國 祐 輔 (都合により御欠席)
津山圏域工業会会長	豆 原 直 行
美作大学長	目 瀬 守 男

学校関係者

校長	阿 部 武 治
教務主事	福 田 昌 准
学生主事	岡 田 正
寮務主事	田 邊 茂
専攻科長	下 西 二 郎
産学連携推進委員会委員長 (地域共同テクノセンター長)	柴 田 政 勝
学術情報委員会委員長 (総合情報センター長)	最 上 勲
機械工学科主任	吉 富 秀 樹
電気電子工学科主任	伊 藤 國 雄
電子制御工学科主任	里 吉 昭 宣
情報工学科主任	大 平 栄 二
一般科目(文科系)主任	杉 山 明
一般科目(理科系)主任	本 元 基 司
将来構想委員会委員長	小 西 大二郎
事務部長	仁 科 幸 雄
総務課長	大 島 康 男
学生課長	杠 孝 之
地域連携・広報室長	井 上 哲 夫
総務課課長補佐	大 倉 壽 夫
総務課総務係長	山 本 純 生
総務課総務係員	山 本 裕美子

4 議事等

- 一 開会
- 二 校長挨拶
- 三 有識者懇話会委員及び津山高専出席者の紹介
- 四 日程説明
- 五 座長選出
- 六 津山工業高等専門学校の現状説明
 - 全国国立高専機構の現状（校長）
 - 津山高専の志願者確保に向けて（教務主事）
 - 専攻科充実に関する取り組み（専攻科長）
 - 産学連携・地域連携活動の現状について（地域共同テクノセンター長）
 - 志願者減少の長期的対策（学科改革）について（将来構想委員会委員長）
- 七 質疑応答・意見交換
- 八 有識者懇話会委員による評価
- 九 座長挨拶
- 十 校長挨拶
- 十一 閉会

5 質疑応答・意見交換・評価要旨

（1）全国国立高専機構の現状について

（質疑応答）

- Q. 国立高専について、現在の段階で16校の統合等が進められており、津山高専はその中に含まれていないとのことですが、今後津山高専が統合される心配はないのか。
- A. 16校の統廃合は現中期計画の中での話で、今後の中期計画では学科の統廃合などの方針も出てくる可能性があります。学校の統廃合についても、社会の動向次第では、今後どうなるか分からないところです。

（意見・評価等）

- * 地域としては、学校がなくなってしまうのが一番心配である。合理化で高専を減らすと言うが、日本は資源がなく、外国から輸入した材料を加工し、付加価値を付けて高く売るといふことしかできない国だから、高専というのはむしろもっと増やさなければいけない。それを減らすというのは、根本的に間違っているように思う。

（2）志願者確保について

（質疑応答）

- Q. 津山市を中心とした県北からの受験者が多いということだが、中学校訪問では県南の方にも行っているか。
- A. 県内の中学校は、一部の離島を除いて全部回っています。県北については、元中学

校長の方にアドミッション・アドバイザーを依頼しており、この方が、校長同士のつながりもありますので、2回、中には3～4回回ってもらっている学校もあります。

Q. 中学生の進路決定について、保護者や中学校の先生の影響も重要であることは間違いないと思うが、一番大きなウェイトを占めるのはオープンキャンパスではないか。オープンキャンパスの開催回数が現在年1回とのことだが、開催回数を増やすこと、そして、来てくれた学生に「この学校に行きたい」という気持ちを持たせるような、魅力あるオープンキャンパスになるよう学校側が知恵を絞って工夫する必要があると思われるが、現状はどうか。

A. 今年のオープンキャンパスでは、学生に説明係をさせるなどなるべく学生を前面に出すようにしましたところ非常に評判が良く、保護者の方からも「いい学生さんばかりですね。」という声もいただきました。内容は、午前中に希望の2学科を見学していただき、午後は実際に各学科で行っている実験・実習の一部を体験するようなものにしております。

(意見・評価等)

- * オープンキャンパスでは、学生を案内など前面に出して対応させると、その学生の姿を見て保護者の方が安心するという面があるので、非常に良い試みと言えるのではないかと。
- * 中学校訪問時に、その学校からの卒業生を連れて行くなどで好感、親密感を高め、中学校の先生とのコネクションを作っていくことが大切である。また、中学生に高専の説明をする場合も、その学校の卒業生が「津山高専はこんなに素晴らしい学校ですよ。」と説明すれば、年齢も近くて中学生が共感を抱きやすく、志願者の掘り起こしにも繋がると思われる。卒業生から母校へPRすることが何より効果的であろう。
- * 中学校との連絡を密にする方がよい。その点、元中学校長の方にアドミッション・アドバイザーとして活動してもらっていることは評価できる。
- * 志願者減少傾向に歯止めがかかったというのは非常に重要なことで、リスクを考えつつも少し思い切った手を打てるようになるのではないかと。

(3) 専攻科の現状と課題について

(質疑応答)

Q. 専攻科を選ばない理由として、就職面で不利との回答があるが、専攻科生に対する企業の評価は、どの程度にランク付けされているか。また、本科生の場合はどうか。

A. 最近では高専の専攻科が企業に認知され、専攻科生と明記した求人もかなり増えてきており、多くの企業では学士レベルの扱いを受けているのが現状です。ただ、2～3年前までは専攻科生への求人はあまりなく、その頃の印象が残っているのではないかと考えられます。この点は学生に対して盛んにPRしているところではありますが、まだ十分に理解されていないようです。

なお、本科生に関しましても企業からは高い評価を得ています。年齢が2歳若い分給与面で大学卒より低くなるのはやむを得ないにしても、大学卒とほぼ同等に扱って

いただいています。

Q. 高専生の出身地域を見ると地元、つまり津山周辺の出身者が6割となっているが、就職に関しては4割の進学者を除く残り6割の者が就職で、そのうち地元への就職者となるとかなり少なく、高専が地元から若干浮いている印象がある。地元就職をもう少し増やすような活動が必要ではないか。

A. 地元就職者が少ないことについては、親元から離れて都市部へ行きたいという理由もあるかと思いますが、また、景気動向に左右されず安定的に受け入れてくれる企業があるかとなるとなかなか難しい面があって、この点も地元就職者が少ない一因ではないかと思っています。

Q. 高専の学生は、就職先でも、進学先でも非常にレベルが高い。中途半端な高校から中途半端な大学へ進むよりは、むしろ高専へ行って技術を身につけた方が、良い企業に就職できるという実態がある。また、進学面においても、高校から大学へ進学するより、高専から編入学する方が更にレベルの高い大学へ入ることができる。しかし、そのような高専の優れた点が地域の保護者の方々にあまり知られていないように思うので、もっと積極的にPR活動を行い高専の良さを認識してもらう必要があるのではないか。

A. オープンキャンパスや授業参観・公開等の行事の際に専攻科をPRしたり、保護者に対する専攻科説明会なども色々と実施していますが、今後も更に積極的な広報活動を行いたいと考えております。

Q. インターンシップの実施が地元就職の増加に繋がるように思われるが、インターンシップの受入れ実績はどうか。

A. 本校では比較的長期のインターンシップを制度化しましたが、単位を与える関係上企業の方に評価をお願いしなくてはならず、そのためにはきめ細かい指導が必要になります。これは企業の方にはかなりの負担になると思いますので、今年度はまだ企業ではほとんど受入れ実績がありません。今後の状況を見ながら、学生、企業の双方にとって魅力的なものになるよう改善していきたいと考えております。

(意見・評価等)

* 専攻科へ進学しなかった理由として研究テーマの問題を挙げた学生がある。本当に学生にとって魅力がある研究テーマなのか、また社会、企業からのニーズがある研究テーマなのか、今一度御検討されるべきではないか。

* インターンシップもやり方次第であり、企業に任せてしまうと負担が大きいため、学校側がもう少し協力して企業に負担がかからないようなことを考えてはどうか。

* 地元への就職率を上げるには、教員が共同研究などで地元企業との連携をつくり、そこへ学生を巻き込んでいくような、先生と学生が一緒になって地域に向き合う形が良いのではないか。

(4) 産学連携・地域連携活動の現状について

(意見・評価等)

- * 高専との連携は、共同研究等何か具体的な成果を求められるとか、やや敷居が高いと感じるところがある。後援会的なものを作るとか、まずは相互理解を築いていくところから始めてはどうか。

(5) 志願者減少の長期的対策（学科改革）について

(意見・評価等)

- * 市役所を始め地方自治体の行政職などへの就職先を開拓するのも、地元就職者を増やしていくための一つの方策であろう。新しい分野を採り入れる際には、地域社会に対応できるような弾力的なコース的なものを専攻科に設けるなど、地域に関連づける工夫をしてはどうか。
- * これからの時代は「環境」という問題が非常に大きく、地球規模のニーズがあるのではないか。また、中学生にとっても分かりやすいイメージがあると思う。
- * 例えば「情報」と言ってもその定義は学校によって様々であり、津山高専の「情報」ではどのようなことを学習するのか、中学校の進路指導の先生がきちんと説明できるかという点と難しい。分かりやすさというのは一つの重要なキーワードであると思われる。あまり安易に時代に迎合しすぎ本質を失うようなネーミングはどうかと思うが、志願者が減少傾向であれば、やはり中学生に分かりやすいということが重要な意味を持つてくる。
- * 高専では今後どういう方向の人材育成を目指すのか。高度な、学術的な研究を指向していくのか、本来の設置目的のように、生産技術的方面、実践的な技術者の育成を目指すのかということだが、やはり日本が世界に誇れるのは生産技術、それを支えていく現場に近いような開発や研究をするような技術者の育成にこそ高専の存在意義があるのであって、そこは大学が入れない領域であると思う。
しかし、高専の教員に実践的な開発、研究の経験があるかという点、特に若い方は企業経験がない人が多い。そういう実践的な面の経験がない教員は、是非企業に研修等に行かれてはどうか。
- * 高専は全国どの学校でもほぼ同じようなことをやってきたが、これからは各学校がそれぞれの個性を打ち出すことを求められる時代になってくる。津山高専でも、津山高専の機械工学科はこうだ、という個性を出していく必要があるのではないか。
- * 学科改革についてはまだ抽象論なので特に意見はないが、コース制の導入というのは、なかなか名案ではないかと思われる。

(6) その他

(意見・評価等)

- * 学生が地元に残らないという問題が言われているが、結局、学生の受け皿ができていないことが大きい。今の状態で津山高専の学生に地元に残れと言っても、なかなか難しいだろう。津山高専に問題を提起し、あるいは要望する前に、学生にとって魅力的な企業を誘致することであり、むしろ今は地元側の課題の方が大きいと思う。

- * もし津山高専が他の地域に移転するという事になれば、大変なことだと大騒ぎになると思う。市民の側に今はそういう意識が低いと思うので、やはり後援会的なものを立ち上げるなり、地域の方々に考えていただき、高専の支援をしていただきたい。
- * 外から見たときに、高専はイメージが硬く、華やかさがない印象がある。中学校の理工系志望者でも、高専に行くより高校から大学の理工系学部を目指す学生が多い。
- * 高専では、高校とは違うことを学生に与えられると思う。例えば、学習する習慣を身につけさせるなど、方法があるのではないか。
- * 定員削減対策として、授業を担当できる助教、あるいはT Aの有効活用などが考えられる。資金面の問題もあるが、運営費交付金が減額される以上、やはり外部資金、共同研究等の間接経費を活用するなど、工夫して欲しい。
- * 広報関係では、ホームページの情報をもっと充実すること、弥生祭を効果的に活用することなどが考えられる。
- * 主に経済界からだが、運営費交付金を大学、高専へ均等配分することへの批判や、学校間に競争原理を大幅に採り入れるべきだという声がある。研究とか、目先の利益に繋がることばかりが重視され、教育は全く軽視されているような気がする。やはり津山高専の後援組織を作っていただいて、今日のような機会以外でも高専をサポートしていただくのが良いのではないか。